

言語の進化とフランス語の成立

L'évolution linguistique et l'émergence de la langue française

櫻井 健

SAKURAI Takeshi

1. 制度としての言語

言語は、社会的な環境と深く関わり社会を構成するような慣習から成り立っているある種の総体あるいは習慣の束と規定することができる。この点で言語は記号論的なやりとりからなる閉鎖系のシステムではなく、人間の活動そのものといった性格を持つといえる。言語の変化する性質と記号論的捉えかたは整合しにくい。

言語は複層的慣習であり動的である。人間の活動において、主体は主体的に行為をおこなうが知識や判断力に限界があり、このため習慣は静的な状態にとどまることはない。言語活動も主体の不完全な知識や判断力に規定される性質を、たとえば経済活動など他の人間の活動と共有する。静的均衡が“科学的”とする新古典派経済学的アプローチに対して実際の経済活動は複層的な慣習であるのに似て、言語を静的均衡状態として捉えるのは困難である。

われわれはこのような慣習の束に対して“制度”という概念を持ち、言語はそのひとつと捉えることができる。制度の運用において、主体は慣習を考慮しつつ、その範囲とおもわれる範囲で、能力に見合うだけの活動をおこなう。慣習は抽象的ではなく、主体にとって判断可能でなければならない。個人あるいはある主体の知識や判断力が不完全なために、習慣に基づく主体の行為がつねに最善の結果をもたらすことはない。言語活動も主体の不完全な知識や判断力によって規定されている。

Li(1995)は、言語変化の非予見性を解決するためのツールとして進化生物学的手法を挙げている。¹⁾ 生物学的進化と言語変化とに類似性があるのは直感的に理解できる。理論経済学でも事情は似ており、実際この方法論は近年よく用いられる。新古典派の理論に見られるような行動の合理性を完全なものせず限定的なものとして規定することで、この分野への進化生物学的手法の導入は成功した。一般に市場メカニズムなどの制度はシステムの自己組織化という側面を見せる。そこに観察される変動は合理的行動の結果ではなく、限定的な知識に基づいて行われるさまざまな行動の集積だといえる。

限定的知識に基づく行動といっても無原則なものではなく、主体(エージェント)たる個人はそれぞれの場面で最適と思われる戦略を採用する。言語活動における最適とはなんだろうか。Ulbaekによる次のような指摘がある(1998:38)。

...language as a means of giving information away would scarcely seem to be an *evolutionarily stable strategy*.

この指摘の問題は言語的に交換されるのはつねに情報とは限らないことを考慮していないことにある。発信者にとっての陳述の本質は、陳述が虚偽である可能性に対する受信者の疑念を除去することにある。陳述によって発信者は受信者を“説き伏せ”，それに対する反応行動の“正当”な根拠を与える。相手も言語使用を行うと判断していれば，両者の関係は言語使用によって“最適化”される。その意味で言語を採用するのは安定的な戦略である。言語使用によって社会的関係がより容易に成立する。この最適化のパラメータは環境依存であり、戦略としての安定性は依存する環境によって変化する。

2. 慣習と概念化，制度

効率的な言語の組織化にはある程度のモジュール化，階層的な概念化が不可欠である。環境適応的な意味で効率のよいものが概念化にあたって取捨選択される。環境の多様性が選択される効率のよさを規定し，さらにそれが歴史的経路を規定する。ところで言語における中心概念は言語の外見的多様性に対して言語間での一般性や共通性が高い。共通性は，概念の階層的組織化のあり方にも認められる。こうした特徴は，言語というものが限られた資源を有効に活用するように組織化された慣習の束，あるいは制度であるために，共通して一般化されると考えてよいだろう。

人間による社会的制度は内部的構造を持ち，言語も例外ではない。社会的精度を構成する機能的単位の内部にも，また単位相互間の結びつきにも傾向が認められるが，これを補完性と呼ぶことにする。制度の変化はこれらの結びつきが緩いにせよ強固にせよ補完的傾向を示しながら生じる。制度の内部では，ある仕組みの出現率が増加するほど，その仕組みを用いることが有利となる。実在するある制度が，当初選択される環境において歴史的理屈などにより最適としても，それ以降つねにそれが最適とは限らない。このような制度を歴史的に経路依存的な制度と呼ぶ。

制度は，ある状況における個人の意思決定が限定的にしか合理的ではなく（限定合理的），またその効果が複雑な結果を及ぼす可能性があることについて不完全にしか知りえず，制度が複層的な依存関係にあるような場合，問題を解決しやすくするために必然的に自己組織化される。言語に関していえば，たとえば「文法」という制度は，ある状況を陳述することを効率化するために存在するといえる。

制度分析の方法の一つとして，人間の活動をゲームとして記述する進化生物学的手法を挙げることができる。ここではモデル的ゲームは每期ごとに不特定多数からランダムに行われる。ある戦略を採用することで得られるメリットは，社会における戦略分布に対して依存関係にある。行動を規定する限定合理性は，慣性，近視眼，試行錯誤という3要素から構成され，²⁾このうちとくに慣性と近視眼によって人口の戦略分布はつねに変化する。社会的習慣の変化はこのようにモデル化される。

主体としての人間は合理性という視点からは不完全な存在である。その限定合理的な行動は演繹的なものではなく帰納的である：たとえば人間は経験的に得られる「型にはまっ

たやり方」を実際の状況に最適と思っているかのように適用する。つまり社会的な制度は人間の意思決定における補助的役割をも果たしている。主体の意志決定は主体のみによってなされるのではなく、主体が含まれる制度にも多くを依拠している。行動のルーティン化とはまさにこのプロセスそのもので、ルーティン採用による不利益が、判断の限定合理性の持つ不利益よりも少ないために、制度は（みずから）創出し進化すると考えられる。

3. 異なった社会の接触

社会の慣習、ルール、制度の変化は、歴史的初期条件、過去の環境変化の経緯、社会内での実験、政府などの介入、異文化との接触などに規定される。

青木・奥野(1996)のモデルでは、2つの社会を含む環境におけるそれぞれの社会の相対的規模と2つの社会の統合度が与えられれば変化を理論的に予測できる。それぞれのパラメータが明らかになれば、習慣の持つ価値によりどちらの社会のタイプに接近するかの予測も可能となる。

たとえばスペインによる中南米の征服では、相対的人口も統合度も低い環境であったにもかかわらず、征服者の文化が被征服者の文化を圧倒する現象が見られた。これは両社会の習慣の質があまりにも異なっていたことを裏づける。新世界の社会システムはこの突然変異に優る戦略を持っていなかった。逆に、旧世界では他の社会との接触が恒常的であるという経路的な条件によって、対応可能な突然変異戦略をはるかに多く含んだシステムが形成されていた。このような接触のパターンは、植民地と征服者とに一般的に見られる。一方、かりに習慣の質が固定できるならば、人口比率と統合度(政治的、経済的な制度の共通性を指標化できればよいかもしれない)によって、変化の方向が予測できる。

フランス語の成立時期においては大規模な文化間接触が生じていたことを疑う余地はない。しかしその実態についてはあまり具体的に知られることはない。征服民と被征服民との文化的なレベルの違いなどが指摘される場合があるが、接触の最初のインパクト以降進行したであろう文化的平準化と、にもかかわらず数世代継続された多言語状況とのずれについて、もう少しダイナミックな視点が必要と思われる。その意味で青木・奥野(1996)のモデルを検討することは有効である。これとは別に、フランス語に見られる複層的な言語現象を解析することで、具体的なフランス語の成立要件を検討できれば、このような初期フランス語成立への理解が進むであろう。

4. 現代フランス語における語順の制約と構文化

現代フランス語は文構成要素の順序が厳密な言語といえる。文頭に主語名詞句、次に動詞、目的語があればこれに後続(語彙的要素の場合)するのが原則である。さらに非標準フランス語では、文構成要素は強い語用論的制約を受けるという(Lambrecht 1994)。

①文頭位置は話題化対象(TOPIC)に用意されており、焦点化要素(FOCUS)には許されない。

②焦点化要素が現れる場合は文末に限定。

イタリア語では文頭名詞句が話題化対象ではないことを音調的強勢と主語の位置によって表示されるし、英語では強勢位置で文全体の焦点化を表示(Lambrecht 1994:149ff)するのだが、非標準フランス語では、主語の位置変更も文頭へ焦点化要素を置くことも不可能であり、そのために次のような構文化による解決策が採用されている(Lambrecht 1994:14) :

(1) (いつも車で来るはずの人が歩いてきたので“車は?”と尋ねると)

(Ma voiture) elle est en PANNE.

my car is in breakdown

“(車は) 壊れちゃったんだ”

(2) (なにかあったらしいので“どうしたの?”とたずねると)

J'ai ma VOITURE qui est en PANNE.

I have my car that is in breakdown

“車が壊れちゃって”

(1)は標準的構成だが *ma voiture* は焦点化不能、動詞を文頭、主語名詞句を文末に置くのは統語論的に不可能

(2)には文(節)末スロットが 2 つある。分裂文構成により焦点化対象の名詞句が入る動詞後続位置が 1 つ増える。VOITURE は、文頭がないこと、avoir 節の目的語で主語ではないことにより、焦点化対象であることが示される。

(1)では焦点化と主語との共起(すなわち文頭での焦点化)を許さない制約によって文末要素の焦点化のみが許される。言表全体が焦点化対象となる場合、あるいは VOITURE が焦点化される場合、(1)の構文は語用論的制約から不可能となる。

VOITURE を焦点化する場合には次のような構文が用いられる :

(3) (バイクが壊れたらしいと聞いて尋ねると)

C'est ma VOITURE qui est en panne.

it's my car that is in breakdown

“壊れたのは車(の方)だ”

(4)は文頭に強勢のある名詞句は置かれないという音調の制約にも反する。

(4) *MA VOITURE est en panne.

my car is in breakdown

“車が壊れたんだ”

(2)の構文が語用論的機能を示すのは、構文がこの機能を持つからであり、構成要素の組み合わせからはこのような機能は導き出されない。avoir と分裂文によるこの構文は語用論的動機づけを受けた構文で、統語論的制約を破ることなく、語用論的な制約にも反しない。さらに最後の音節に強勢が落ちる音韻論的規則もクリアする(Lambrecht 1994:25)。同様に(3)の c'est...qui...の構文も文頭での焦点化を避ける語用論的な動機づけを受けている。

現代英語での語用論的制約はフランス語より緩やかで、強勢によって焦点化要素が示されるのでフランス語のような構文の多様化の必然性はない。

"It represents one of the specific solutions in French to the competition between syntax and pragmatics." Lambrecht(1994:25)

5. 語順の固定と接辞化

Permutter(1971)は次のような言語類型を示した：

Type A: 人称代名詞の使用が義務的。

'non pro-drop' フランス語, 英語など

ex. Fr. il pleut 'it rains'

Type B: 意味的に主語がない場合, 人称代名詞は使用しない。

'pro-drop' イタリア語など

It. ø piove 'it rains'

Haiman(1991)は両タイプ間に漸進的移行を想定, 北イタリア諸方言の分布でこれを示した。Lambrecht(1981,1988)によれば非標準フランス語の支配的語順は V(X)で, 主語代名詞は文法的一致を表示する前接辞として捉えられる。動詞の左には接辞 clitic のみが置かれる。他の要素は left dislocation で節の外側にある。

(5) Il mange et boit comme un cochon.	Standard French
I mange et i boit comme un cochon.	Non Standard French

印欧語的には Type B が古いのは明らかで, その意味で A は B から変化したと考えられる。現代フランス語での支配的語順 V(X), 動詞の形態論的要素の性格を持つ主語前接辞などと類似の現象が, 北イタリア諸方言でも見られる。このような特徴が出現するための前提としては, 統語論的自由度の減少 (語順の固定化), 文における要素位置の語用論的機能の文法化を挙げておく必要があるだろう。

Poletto (1995) は, 北イタリア諸方言の人称代名詞/接辞の歴史的発達, 現代フランス語と同様の段階を経て, 現代では使用が義務的 (特に 2 人称単数で顕著) になっていると述べる(1995:300ff, cf. Haiman 1991:148ff)。

ここでは Haiman(1994:146)に従い Type A と Type B の中間的段階として Type O を考える。動詞直前は接辞位置, 文頭位置は話題化対象名詞句 (語彙的内容を持つ代名詞を含む) に用意されるスロット。接辞は義務的で主語の二重表示の可能性がある。動詞直前に

目的語接辞や否定接辞が入る場合、主語接辞は義務的あるいは省略可能かのどちらかになる。

O型言語の主語接辞が他の接辞に見せる反応はいわゆる V/2 言語に近い。A型は語順が固定的で、動詞が文頭に置かれるのを避けるためダミーが用いられるが、O型では動詞スロット直前の要素（話題化された名詞句あるいは“文頭”そのもの）が動詞に直接先行することを避けるために接辞が挿入される。統語情報に反応して選択されるという点で完全に形態論的要素として文法化されてはいない。この特性を失うと接辞と動詞の順序は固定され、文法化はさらに進行する。統語情報への反応がなくなる（接辞として主語要素以外動詞直前スロットに許されなくなる）と、接辞は動詞の一部となると判断できる。

6. 接辞化の動機と文法化のプロセス

接辞形態素と語彙的人称代名詞との関連性は明白だが、接辞文法化の動機は何だろうか。Poletto(1995:303-5)はルネサンス期のヴェネト方言を検討し、次の点を指摘している：

- ・主節において2人称単数と3人称単複数では主語代名詞が必ず現れる。
- ・これらは従属節がwh-語か接続法を含む場合には削除される可能性がある。
- ・その他の人称・数は節の種類に関係なく人称代名詞が削除される可能性がある。
- ・ルネサンス期のフランス語でも人称・数による人称代名詞の同様なふるまいが見られる。

	MAIN CL		EMBEDDED CL -wh/subjunctive		EMBEDDED CL +wh/subjunctive	
	Veneto	French	Veneto	French	Veneto	French
Expletive <i>pro</i> -theta		+		+		+
1.sing. <i>pro</i>	+	-	+	-		+
1.plur. <i>pro</i>		+		+		+
2.sing. <i>pro</i>		-		-		+
2.plur. <i>pro</i>		+		+		+
3.sing. <i>pro</i>		-		-		+
3.plur. <i>pro</i>		-		-		+

(代名詞削除→+)。

Poletto(1995:304-5)より作成

ロマンス諸語では選択的な代名詞の義務化が歴史的流れとして一般性を示している。1人称単数でも義務化が進んだフランス語のほうが、より接辞化が進行していると判断される。

西ヨーロッパの印欧諸語では、2人称とりわけ単数は動詞に後置されることが多く、これが一般化して後接辞となるプロセスを想定するのは比較的容易である。⁵⁾ 主語人称代名詞の義務化は3人称で早く行われているので、接辞の前置に関しては別の根拠が必要だろう。1, 2人称は語彙的意味が明確で、印欧諸語では動詞に明示される傾向が強い。3人称代名詞はすでに談話中に指示されている人物やものとの関係ではじめて内容に参照する指示辞 *determiner* の性格が強く、1, 2人称と異なり、性の区別を持つ可能性がある。代名詞を用いることで、動詞のパラダイムによるよりも多くの情報を示すことも可能にな

る。

7. 語順が固定されるプロセスの想定

ドイツ語の典型的語順が SV(O)なのは、話題化対象→主語の関連性の高さによる。代名詞の義務化傾向もこの前提に基づく。フランス語の語順固定化にもこの関係は反映されている。フリウリ語などの人称代名詞二重使用は、語順の固定化と接辞の義務化の 2 つのプロセスを含む混合的戦略といえるが、現代フランス語の焦点化に関する構文の発達も、同じように以下のプロセスを含む戦略の混合という側面がある：

①主語代名詞の義務化

②主語代名詞と動詞の位置関係の固定

③（動詞直前への焦点化要素はロマンス語では制限）文末の焦点化位置としての固定主語代名詞と動詞との位置の固定は主語代名詞の義務化を規定するが、逆に位置関係の固定もそれによって規定され、③の語用論的条件によってさらに強化される。このようにそれぞれのプロセスは密接に絡み合っていて、独立した現象ではない。

A型とB型の相違は、前者が統語論的語順、後者が語用論的語順を示す点にある。イタリア語は古い印欧語の順序をよく保っている。印欧語の古い段階では動詞の位置は相対的で語用論的動機によって決定されたが、イタリア語ではそこまでの自由度はない。⁶⁾動詞がもっともよく置かれる位置が動詞の絶対位置として再解釈されたものである。フランス語において焦点化対象が文末に限定されるのは、イタリア語とも共通する古い特徴である。

代名詞の義務化・接辞化は動詞と近接に要素を置く必然性がなければ生じない。ゲルマン語では話題化・焦点化対象とも文頭で可能であり、動詞の位置は文頭の次位に固定している。この点は明らかにイタリア語の特徴と異なる。代名詞が動詞に隣接する頻度が高いことがゲルマン語における代名詞義務化への動機の一つである。本来のロマンス語にこの条件は当てはまらない。たとえばイタリア語にはこのプロセスが出現していない。

こんにちのフランス語の特徴が出現したプロセスには、動詞とその前後位置がゲルマン語的基準で決定されること、そして位置決定された動詞を含む部分がロマンス語的な文のパターンに置かれることが組み合わされたかたちで関与している。

フランス語にはドイツ語のように動詞第 2 位をテンプレート化する語用論的動機はなかった。ゲルマン語との統語論的な類似性のある程度示しつつ、語用論的にはロマンス語的性格を残したまま、Aタイプの統語論化された SVO 型言語へと進化した。そのなかで上に挙げてきたような構文を発達させた。フランス語の成立に当たっての文化間接触は、新しい社会の自己組織化というべきもので、フランス語の特徴はそれまでに存在しなかった新しい慣習として理解すべきである。

8. 結語

ただし、マクロ的にはまた異なった側面がある。西欧諸語の類型的変化、つまりより明

確な対格言語化傾向⁷⁾のなかでは、対格言語の戦略としての有効性の高さ、強さが際立っているわけだが、その戦略では語順として SVO がもっとも高い有効性を示すであろう。つまり、語順の変化もマクロ的には対格言語への適応であるといえる。さらに推し進めて言語類型的に強いパターンの存在という視点をとることもできる。

英語やフランス語といった接触を重ねた言語では固有の歴史的経緯よりも戦略としての有効性が優先されてきた。前段階まで存続してきた印欧語的戦略、つまり経路依存性が制限され、言語接触にあつての戦略の大幅な見直しによって、戦略としての有効性が前面に押し出された。フランス語では、ミクロ的にはゲルマン語との接触を通して採用される戦略に変化が生じたのだが、目指される戦略の有効性が同じだと仮定すれば、(経路依存性による制約より)よりメリットの多い戦略が選択された。その点では同じような状況にあつた英語とフランス語の条件の差はマクロ的なものではなく、節における強勢位置の制約といったミクロ的な差であつた。統語論的戦略と語用論的戦略によって得られる利得が、他の制約によって異なっていれば、違う結果となるのも当然だろう。

言語変化のエンジンは言語内とも言語外とも規定できない。青木・奥野モデルにおける異文化とは外部的でも内部的でもあつて、すべてのレベルに及んで遭遇するものである。今日のフランス語、フランス語の進化の方向性を規定する歴史的条件として、ゲルマン語的要素はもちろんあげられるべきだが、ロマンス語的要素とどちらが重要かということではなく、どちらも最終的な結果に環境を形成するファクタとして関与しているのである。その結果は新たな制度であつて、従来のように系統関係として処理できる問題ではないだろう。

注

本論は 1999 年度日本ロマンス語学会(於愛知県立大学)での口頭発表に基づいたものである。席上、貴重な助言、質問をいただいた方に感謝する。

- 1.) Li 1995:197.
- 2.) 青木・奥野 1996: 279ff
- 3.) 青木・奥野のモデル化を挙げておく(1996: 286-290)

	L	R	
L	2, 2	0, 3	→
R	3, 0	1, 1	

	L	R
L	2, 2	0, 0
R	0, 0	1, 1

図 1a

図 1b

	L	R
L	2, 2	3, 0
R	0, 3	1, 1

→

	L	R
L	2, 2	0, 0
R	0, 0	1, 1

図 2a

図 2b

1b と 2b は環境として同一であるが、歴史的初期条件に規定され、異なった習慣を持つと考える。n は 2 つの社会を含む環境における J 社会の相対的大きさ、β は 2 つの社会の統合度を示すパラメータである。β = 0 ならば鎖国状態、β = 1 ならば完全な統合状態となる。

J 社会では R 戦略、A 社会では L 戦略を採用するのを初期条件とする。なんらかのかたちで統合された 2 つの社会でそれぞれの会員が出会う確率は次の図 3 に示す。この環境において、J 社会の人が R 戦略をとるのが最適反応となるためには

$$Ia \quad 1 \times n \geq 2 \times \beta(1-n) \Leftrightarrow \beta \leq n / 2(1-n)$$

同様に A 社会の人が L 戦略を取ることが最適反応になるためには

$$Ib \quad 2 \times (1-n) \geq \beta \times n \Leftrightarrow \beta \leq 2(1-n) / n$$

	J	A
J	n	β(1-n)
A	βn	1-n

図 3：それぞれの社会の人が互いに出会う確率

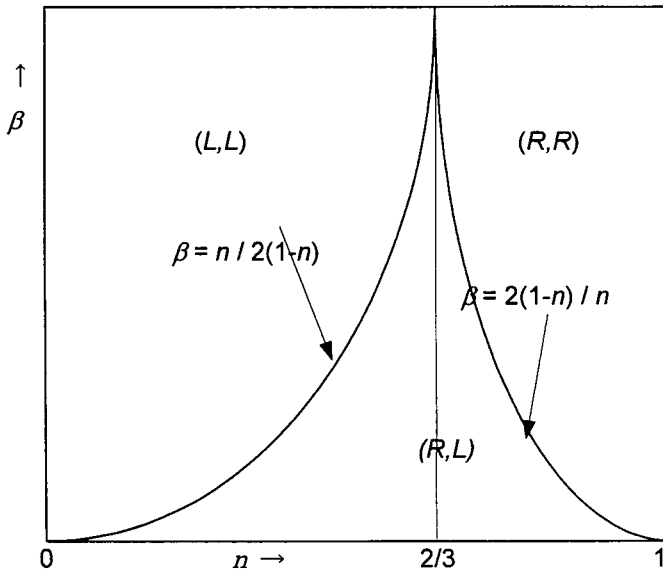


図 4

図 4 における領域(R,L)はこの 2つの不等式を満たす。(R,L)という表記は J 社会での R 戦略, A 社会の L 戦略の全面的採用を意味する。たとえば(L,L)は両方の社会で L 戦略が採用されることを示す。

n が 2/3 より小さい場合には, β が 1 に近づくにつれ J 社会の中で R が最適反応である条件式 Ia が満たされなくなり, L 戦略を採用するメンバーが順次増加する。一方 A 社会で L をとる習慣は変化する動機を持たない。その結果双方の社会で L に従う均衡(L,L)が生じる。逆に n が 2/3 より大きい場合, β が 1 に近づくにつれて, A 社会が R を選択するように変化し, R に従う均衡(R,R)へと向かう。

- 4.) Haiman(1991), Givón(1979).
- 5.) たとえばドイツ語や, スイスのロマンシュ諸語。
- 6.) イタリア語の基本的動詞位置は Wackernagel のいう接辞の位置であろう。
- 7.) レニングラードの類型論での議論を参照。

主要参考文献

青木昌彦・奥野(藤原)正寛(編著)

1996 『経済システムの比較制度分析』 東京: 東京大学出版会。

BAUER, Brigitte L.M.

1995 *The emergence and Development of SVO Patterning in Latin and French.* New York/Oxford. Oxford University Press.

HAIMAN, John

1994 From V/2 to subject clitics: Evidence from Northern Italian. In PAGLUICA, William(ed.), 135-157..

KELLER, Rudi

1990 *Sprachwandel.* Tübingen: Francke

LI, N.Charles

1995 Ancestor-descendent and cultural-linguistic relativity. In SHIBATANI and THOMPSON(eds).191-200.

LAMBRECHT, Knud

1994 *Information Structure and Sentence Form.* Cambridge: Cambridge University Press.

奥野(藤原)正寛・松井彰彦

1995 「文化の接触と進化」『経済研究』46: 97-114..

POLETTI, Cecilia

1995 The diachronic development of subject clitics in North Eastern Italian Dialects. In BATTYE, Adrian, and ROBERTS, Ian(eds). 295-324.

ULBAEK, Ib

1998 The origin of language and cognition. In HURFORD, J.R. et al(eds.). 30-43.